

2023.11.3 :
FM NCV
OKITAMAGO
OPEN STUDIO



Rediscovering life

「くらしの再発見」

遡ること2018年8月。それは、実家に帰省した時のことでした。

その時はなぜか、世の中はちょっとした「縄文ブーム」だったのです。

現代人にとって「縄文」とは、かけ離れた文明であるのに、それがブームになるとはDNAのパワーは絶対的なのもかもしれません。

都会のいいところは、こうした流行りを身近に感じることです。

こうした「縄文ブーム」といった突如現れた暮らしムーブメント系のイベントは、たいてい、上野の博物館を調べれば何かあるものです。

そうしたら、ありました。ちょうど「縄文展」が開催されていました。

都会はこうした流行りを生むのが本当に上手です。いわゆる宣伝上手であり、それが都会の文化を発展させてきたとも思います。

ということで、平日に「今日は空いてるだろう」と東京国立博物館へ行ってみました。

「古代オタク」でもないのに、土偶や埴輪を見ても「おーい!はに丸」に脳内占拠されているし、縄文土器を見ても「お茶、飲みずらそっ」と毎回思っていたのです。

しかし、その中でひと際スタイリッシュなものを見つけました。

それはインテリアにこだわりのある意識高い系の奥様方にもご満足いただけそうな綺麗な土器でした。

普段は展示会の説明文はスルーしてしまいがちですが、気になったので読んでみると。

「重文 漆塗彩文鉢形土器 山形県高島町 押出遺跡」。。。。。

一瞬、「あれっ」と思って、古典的な「二度見」の仕草をしたのはこの時が初めてだったかもしれません。

「高島の資料館って、あそこだよな」と、以前見学した事があるのに、これまたスルーしてしまっていた土器だったのです。

「縄文ブーム」のように、流行り事には必ず仕掛けがあります。

暮らしている町に国指定重要文化財があったら、仕掛け人は「土器Tシャツ、土器キーホルダー、土器鉛筆、土器手帳、土器餅、土器ラーメン」など地場産業とノールールなコラボ無双をさせて観光地化していくのがよくある話だと思います。さらに、恥じらいを捨てる強さを習得した人なら「出会いCafé 土器土器（ドキドキ）」を周辺にオープンするかもしれないのです。

でも、高島町にはそのような「流行」はありません。ただ、ひたすらに文化財にふれたときにだけ「いにしへの暮らし」を語りかけてくるだけなのです。

このようなことから思うのは、移住して12年になりますが、都会のようにガツガツしていないところが置賜らしい良さということです。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というように、人間の寿命を考えても何百年前、何千年前のことは誰にもわからないわけで、未来のこともわかりません。

ただ、いつの時代でもそこには「暮らし」があったわけで、現代に伝わっていることには、暮らしのヒントがあるような気がしています。

毎日が単調な生活だと思ってしまったら、先人の暮らしに目を向け、「出会いCafé 土器土器（ドキドキ）」でお茶を飲むことをオススメします。

そんな何気ないことが「くらしの再発見」につながるのではと思ったところです。

写真・文：塗貴旭



「瑞光寺（川西町玉庭）」



「玉庭ひなめぐり」というイベントに10年ほど前に参加した記憶を頼りに訪問。

やはり記憶は曖昧なもので、瑞光寺の目の前に車をとめてGoogleで検索したら

「目的地周辺です」

とAIに叱られながらも無事に住職の藤田さんとお会いすることができました。

貴重なお話を2時間くらい聞いていたら、今度は僕の方が歴史に詳しくなり大学で講義できるレベルに到達していました。

将棋の駒、玉庭富士、石文化。。。

やはり、「置賜には何かある」というのを確信しました。

気づいたら昼になっていて、奥さんが作ってくれたカレーを食べていました。



「帰りに草木塔の写真撮って から帰ります」

そう言ったのはいいけど、瑞光寺には草木塔が4つもありました。

まずは家の横にあるとのこと
「どれですか？」「それぞれ」
「えっ、どこですか？」「ほら、そこそこ」
という微笑ましい会話をして、1つ目を発見。

見分け方に少し自信がついたので、敷地を出てすぐにあった巨大な岩を見て

「2つ目はこれですね」
と自信満々に写真を撮ったら、それは庭石とのこと。
2つ目はその隣にある小さい石でした。
「カシャ！」

3つ目を探している途中に「果てのない平野」に遭遇。果てしない派閥争いなら松山千春は平野派よりも大空派だったんですね。デザインも現代的な3つ目をゲット。

4つ目はさらに遠くへ。山伏が修行した建物が移築されていたり、ただならぬ気配を感じる石碑、野性的に生い茂る草木、巨大ウンボがスマホの画面に写り、情報量が多すぎる展開に。

「ちょっとウンボがないほうが写真はいいですね」
と言おうとした瞬間に

「これ、俺のウンボだ。遊び用。ふふふ」
と藤田さんのコメントがあったものだから、言わなくてよかったと思うのと同時に、ウンボでどうやって遊ぶんだ？という疑問もわいてきて、さらに情報量が多く混乱するのでした。









長い時間、色々ご案内していただいて感じたことは藤田さんの郷土愛でした。
やはり故郷というのは気持ちにリンクする場所なんですね。感謝！



「今も、まほろば、高畠町」



打ち合わせが終わると、
いつもの流れで
「帰りに写真撮ってから帰ります」ということで、
まほろばの里案内人の高橋さんに案内してもらいました。

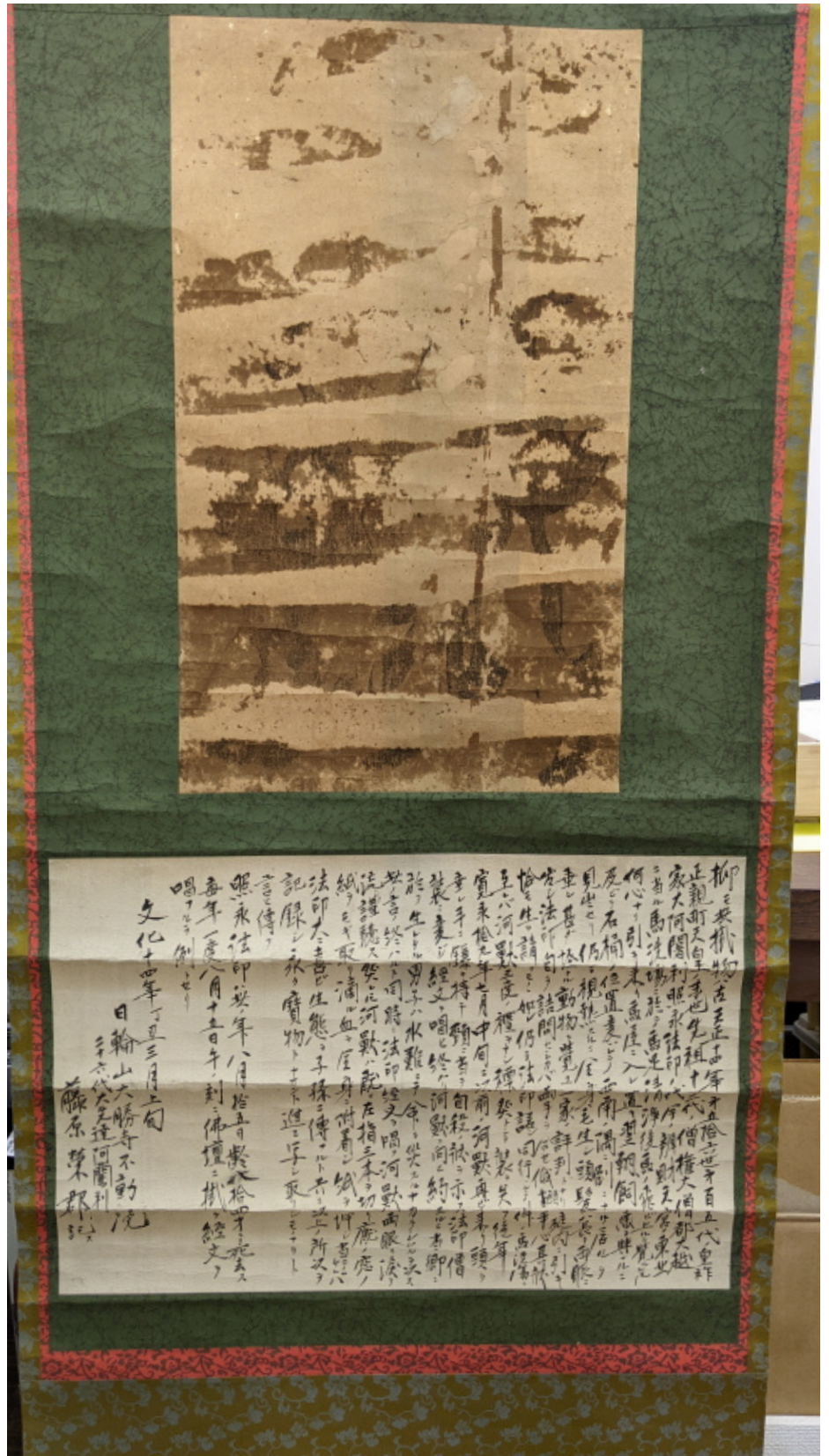
まずは駅前にある河童を撮影。

「なんで河童なの？」

という疑問を解決すべく旅に出ます。



「河童の詫び証文」。



資料館で見せてもらった「河童の詫び証文」。

紙も白く保存状態が良好です。

しかし、このバサバサと塗られているのは河童の血らしいです。

河童が指を切り落として、その血を体に塗って、障子紙にうつして、それで詫びるというエクソシスト顔負けのサイコな伝承話に怖さを感じたところで次に行きます。



修羅という“大ソリ”



昔、大石を運ぶために使ったソリ（修羅という）がある場所へ。

スタスタと進む高橋さんが渡る橋は

「グオーン！ガゴーン！」

と音が鳴り、耐震強度に不安をいだきながらも「まあいいや」と、何がいいんだかわからない理由で自分も進みました。

石階段の上には凜としたたずまいの建築物がありました。

彫刻や作りも見事なもので歴史を感じさせるものでした。

色々で見学して感じたのは、よく昔にこんなものを作ったな。。。ということです。

地面を固める丸太も、木製の滑車も、ソリも何人の人がかかわって出来上がったんだろうと考えると、地域で団結しなければ何もできなかったはずでしょう。

こうしたものが残っていることに「まほろば」を感じずにはいられません。











心が「いにしえモード」になっていた帰り道。 見たことない植物を発見。

「これ絶対に毒あるな」と言う僕に対して
「まあ、毒あるけど、たいしたことない。それより赤と緑のコントラストが綺麗でしょ」

芸術的な美的センスを持つ高橋さんは毒よりも美を選ぶのでした。

マムシグサと呼ばれるこの植物。厚生労働省の食中毒事例紹介によれば「食べると30分以内に口唇、口内のしびれ、腫れなどのほか、腎臓にシュウ酸カルシウムが沈着して腎機能を障害する」とのこと。症例はなぜか男性ばかりで「トウモロコシと間違っ

た」というものもあるらしい。

どう見てもトウモロコシではないです。





大自然をまえに人間の無力さを実感したあと、とんでもなく果てない一本道に遭遇。

松山千春は大空と大地と果てしなく広大なことに関しては、すべて網羅していたんだと悟りました。きっと都会人には全てが終わりなき旅に思えるのでしょう。

すさまじいインパクトを放つブルーの屋根。こんな家は見たことがなかったのです。

戸田家は昔からこの地で暮らし続けてきたらしく、聞けば入口が3つあるとか、釘を使ってないから嵐の時は家から木の音がするとか。。。





「根残し切石」

そのすぐ横に巨大な石がドーンと積み重なっていて、きれいな長方形をしているわけではなく切り出しのままのような形をしています。

高橋さんが「根残し切石」と名付けたこの石は土台に使っていたのでは？とされています。

アシナガバチがたくさんいるのに、素手で石を触る高橋さんには、いにしえのパワーが宿っているのかもしれない。

そこで理系ならではのコメントをしました。

「石材はきれいに切り出すと強度が下がるから、土台に使うならそのままの形の方がいいですね？」
と言うと

「そうかもなー」
という承認を得て気分が良くなったのです。





入口にある石畳は一つだけ丸い石がありました。

「これも入り口だけ違うデザインですね」と得意げに話すと

「ここは井戸があったから、それを塞ぐ石だ。がはは」

ということで、いにしえのパワーの前では理系の知識は無力だったのです。





焼観音という真っ黒な観音様

ここには焼観音という真っ黒な観音様が六体あります。

暗かったので夜景モードで写真を撮ったら、高橋さんが丁寧に懐中電灯を照らしてくれたのでホラー写真のようになりました。





昔の人の暮らしを描いた絵図が残っています。

地域行事のあとにはこうして飲み会をするというのは今も昔も変わってないことです。

結局のところ、みんな酒が好きなんだなと思いました。





この写真に写っている人々は、もうこの世にはいないことでしょう。だから、当時のことを直接聞くことも出来ないから詳しいことはよくわかりません。

けれど、歴史や文化、その土地のことを知ると「きっと、このあと飲み会したんだろうな」という想像はつくわけです。

上野で見た3500年前ほど前の土器が現代人に語りかけるのは、時代はつながっているということ、なんとなく共感できるように伝えている気がします。

それが「くらしの再発見」なのかもしれません。

